

① 10月8日(土) 文楽 (桂) 八代目



1892年	青森	野崎	鯉の 幫間 (たいこ)	景清 (かけきよ)
11.3	森		1971年	1971年
↓	出		7月23日	3月30日
1971年	身		22分00秒	24分47秒
12.12				

② 幫間(ほうかん)

宴席に興を添える職業の男。太鼓持ち、男芸者などという。初めは遊里の案内者として遊客に同伴されていたが、元禄(げんろく)(1688~1704)ごろにはこれを職業として遊興の助言をするようになり、宝暦(ほうれき)年間(1751~64)に遊芸をもって宴席の遊戯的気分を盛り上げる職業人として独立した。幫間を太夫(たゆう)・師匠とよぶのは、彼らが一中節(いつちゆうぶし)・清元(きよもと)などの音曲を表芸にすることが多かったことによる。ただし幫間としては、表芸を演じるのではなく、それを基礎として新古の演芸、物真似(ものまね)、声色(こわいろ)、舞踊などの多芸にわたり、それを即興的、滑稽(こつけい)的にみせるのを特色とする。

遊廓(ゆうかく)や私娼(ししよう)街のほか、市中に住む幫間もいたが(野の太鼓という)、江戸では吉原の幫間を一流とし桜川甚好(じんこう)・同善好(ぜんこう)らが有名となった。一方では、無芸で客に世辞をいって収入を計る卑屈な幫間があり、追従(ついしよう)者を「太鼓持ちのようだ」とさげすむのは、これに原因する。明治・大正期の花柳(かりゆう)界の盛況で幫間も増えたが、現在は数名が残るにすぎない。(原島陽一)

(小学館 スーパー・ニッポニカ2001)

③ 景清

落語。原話は初代米沢(よねざわ)彦八著『軽口大矢数(かるくちおおやかず)』所収の「祇園(ぎおん)景清」で、その系統の上方(かみがた)落語『景清の眼(め)』を三代目三遊亭円馬が東京へ移したため、現在は東西で口演されている。

東京落語の『景清』では、定次郎が急に目が見えなくなり、赤坂の日朝(につちよう)様へ願掛けをする。21日目の朝、すこし見えたので「南無妙法蓮華経(なむみょうほうれんげきよう)」を唱えていると、同じような境遇の女がお題目を唱える声が聞こえ、その女に邪念をもったためにまた見えなくなる。

それから石田の旦那(だんな)の勧めで上野の清水観音(きよみずかんのん)に願掛けをする。ここは昔、悪七兵衛(あくしちびやうえ)景清が目をくりぬいて納めたという京都の清水観音の出店だが、百日通っても御利益(ごりやく)がなく、定次郎は観音様に当たり散らす。旦那に諭されて帰る途中に雷雨にあって気絶するが、やがて気がつくと目があいていた。浄瑠璃(じょうるり)の『壺坂靈驗記(つぼさかれいげんき)』と相通じ、背景に強い観音信仰がある。八代目桂文楽(かつらぶんらく)がこの作品を磨き上げて絶品とした。(関山和夫)

(小学館 スーパー・ニッポニカ2001)

④ 文楽 最後の高座

1971年8月31日、国立小劇場で開かれた「第42回落語研究会」の高座の途中で絶句、とうとうそれが名人文楽の最後の高座になってしまった。今日視聴した翌月の舞台。「大仏餅」という演目で、「神谷幸右衛門」という名前が出ず、絶句、黙って座ったままの状態になった。絶句しているあいだは、そんなに長くなかったが、客はみな、かたずをのんで見守っていた。文楽は高座で一点を見つめている。「もう一度勉強し直して参ります」。顔面蒼白になった文楽は深々とお辞儀をして高座をおりていった。

客席にいた主治医がすぐに楽屋に駆けつけてきて診察、主治医が付き添って自宅に戻る。楽屋では「三代目になっちゃった、三代目になっちゃった」とつぶやいていた。名人と言われた三代目小さん(漱石が天才と言った)も、晩年は噺(はなし)がひとつところをぐるぐる回ってしまったそうで、あわてて前座が幕をおろすのを、若い頃の文楽は何度も見ており、「三代目のようなことにはなりたくない」と常々言っていたのであった。当日、自宅に着くまで、「三代目になっちゃうのか、三代目になっちゃうのか」と文楽は何度もその主治医に確かめたとのことである。

八代目文楽が二度と高座に上がらないまま逝ったのは、四ヶ月後の12月12日であった。

(川戸貞吉 落語大百科 第3巻 冬青社 2001年から抜粋)

⑤ 落語の歴史 上

(「小西甚一 日本文藝史 講談社」より)

- 16世紀頃、上層の公家や武家に、寂しさ・つれづれを慰めるための話のわざで仕える御伽衆、御咄衆
- 安楽庵策伝「醒睡笑」(1628年)→表現としては純然たる笑話
- 「昨日は今日の物語」(1624~1633年)→伽の席における話から取材したものであろうが、笑話に徹する姿勢を示す
- 江戸の鹿野武左衛門「鹿の巻筆」(1686年)→不特定多数を相手に話芸を売る。仕形(状況を身ぶりによって模写する)、軽口の進出(「落ち」すなわち機智的な戯作笑によって結ばれる)の二つを特徴とする
- 三遊亭可楽(1777~1833)→1804年ごろから落とし咄で人気を得、専業の噺家として身を立てる。その門下に朝寝房夢羅久(1777~1831)など
- 烏亭焉馬(うていえんば)(1743~1822)→「落噺無事志有意」という小咄を集めた本を編集し、弟子に三遊亭円生(1768~1838)があり、文化・文政(1804~30)は落とし咄の精練期と認めてよい
- 焉馬に移籍した朝寝房夢羅久は、浄瑠璃出身の経験を生かし、世話物ふうの設定を落とし咄に持ち込み、これが後に人情噺と喚ばれるジャンルの骨格をなす。人情噺とは、世話物講釈と落とし咄の中間めいたジャンルだが、滑稽味をあまり表面に出さない。これを大成したのは、三遊亭円朝(1839~1900)である。二代目円生(1806~62)の門下として在籍した円朝は、師よりもむしろ夢羅久の芸風を生かし、人情噺というジャンルを確立するが、それは明治期に入ってからのものである 以上